

The PHOTO JOURNAL

VOL.0006

2015年1月1日
無料

<http://www.thephotjournal.org>

Photo news stories and documentaries since 2015

©2015 Yuki Iwanami

供養の夏





先祖代々のお墓で手を合わせる根本常子さんと和徳さん。墓地の奥には福島第一原発の一部が見える（福島県大熊町）

写真 文/岩波友紀

離れていた家族が久々に集まり、セミの声を聞きながら皆でお墓参りをする。賑やかで楽しいひととき。それが日本のどこにでもある田舎の風景だろうか。しかし、ここ福島県大熊町にその風景はなかった。家々には人の気配はなく、墓地には静かに風が流れる。「おー、元気だったかい!」。旧知の知り合いに声をかけられ、根本常子さん(74)の顔がほころんだ。

常子さんと息子の和徳さん(40)は避難先の金沢市からお盆に合わせ数ヶ月ぶりに町に一時帰宅し、常子さんの夫も眠る墓地に手を合わせた。生まれてからずっと町内の夫沢地区で生きてきた常子さん。お墓参りの後に立ち寄った自宅は草が生い茂り、物が散乱したままの室内は次第に朽ちていつているのが目に見えた。誰も通らない家の前の小道を眺め、子供たちが自転車で駆け回っていたことが目に浮かぶ。故郷を離れて、ここが一番心癒される場所だと始めて気づいた。決して息子や孫など若い人には強要しないが、自分だけでも夫の眠る故郷に絶対帰ってくるという強い意志は変わらない。「どんなことがあっても帰ってくるから、それまでここを待ってね」、残したままにしてきた夫に常子さんはそう語りかけた。

福島県浪江町請戸地区。津波に破壊されたままの墓地を歩く人たちがいた。若瀬チヨコさん(81)、児玉ミツコさん(77)、杉山弘子さん(74)の3姉妹。お盆にあわせ、38歳で亡くなった3人の妹のお墓参りに来たという。請戸で生まれ育った姉妹。それぞれ故郷を離れた後、現在児高さんは広島県、杉山さんは東京に住み、結婚後浪江町内に戻ってきた若勢さんは原発事故で郡山市に避難している。



津波で壊滅し、さらに原発事故により今でも立ち入りが制限されている故郷。杉山さんはそんな故郷をずっと見たくなくて、震災後一度も来られなかったという。「お墓の石が立っている」。テレビで請戸の墓地の映像を見て、一度は行かないといけなさと感じ初めてみんなと一緒に訪れる決心ができた。町を出てからも夏休みには必ず子供を連れて3姉妹みんなが実家に集まって過ごした。夏でも船に乗ると風が涼しかった。「胸が苦しい」と、杉山さんは初めて目の当たりにした変わり果てた故郷を見つめた。

プレハブ小屋に安置された本尊に向かい、地元的女性たちが読経した。岩手県大槌町にある蓮乗寺。津波で押し流された瓦礫の火が移り、寺は全焼した。



吉祥寺（大槌町吉里吉里）の灯笼流しの撮影のために船に乗せてくれた漁師の倉本修一さんの息子・来稀くん（6ヶ月）。福来旗（大漁旗のこの地方の呼び名）からつけた名前だ



読経をあげながら旧大槌町役場前を供養して回る蓮乗寺の檀家たち。家がなくなった町を漁港まで歩く



福島県浪江町の津波が襲った墓地で、妹のお墓を探す若勢さん。この時期、それぞれのお墓には多くの花が手向けてあった



吉祥寺で、花火をする少女。送り火と一緒に花火をするのもこの地域の風習だ



江岸寺（岩手県大槌町）の津波で流された墓地で墓参りする人たち。後方にもあったお墓は取り壊され、かさ上げが進む

東日本大震災被災地 4年目のお盆

住職の木藤養頭さん（57）は燃える庫裏からろうじて本尊だけは持ち出し守ることができた。長くプレハブの仮設本堂で活動してきたが、来年にはようやく新しく本堂が完成する予定だ。

毎年お盆には檀家たちと一緒に家々を読経して回るのが恒例だった。震災後は中止していたが昨年に復活。法衣姿の女性たちが家がなくなった町内を、太鼓をたたきながら回る。最後に着いた漁港からは小さな船で精霊を送る「舟っこ流し」も行われた。漁船に乗った木藤さんらを檀家たちが読経で見送る。沖で海に流された舟に火がつけられ、津波が押し寄せた湾に小さな炎が立ち上がった。

同町では、お盆には送り火や迎え火を玄関の前やお墓の前でする風習がある。震災から3年半たっても家もお墓も再建がままならず、今年も仮設住宅や崩れたままの墓地で小さな炎が寂しく灯されていた。（2014年取材）



岩手県大槌町の仮設住宅で、送り火をたく人たち



The PHOTO JOURNAL

VOL.0006